

日本社会における母方祖父母の意味

蓼 沼 康 子

1. 問 題
2. 母方祖父母と孫の関係
 - ①新潟県朝日村高根—バアベエ—
 - ②山形県温海町越沢—マゴノイエ—
 - ③福井県小浜市高塚—センダクガエリ—
 - ④富山県射水郡—ツケトドケ—
3. 母方祖父母の意味
4. 結 語

1. 問 題

本論では、日本の家族における祖父母と孫との関係を、父方のみではなく母方の祖父母との関係に注目して分析することを目的とする。日本の家族研究において、親子関係の研究がさかんに行われてきたのに比して、祖父母と孫との関係はその量からも非常に少ない。さらに、「家」継続という点からは、先祖とはならない母方の祖父母と孫との関係は記述に残ることも少なかった。ここでは、親子関係とは異なるものとしての祖父母と孫との関係、とくに「家」原理を超えるものとしての母方祖父母と孫との関係を含めて検討していきたい。

父系的三世代直系家族を志向してきた日本の家族において、祖父母と孫の関係としても同居する父方の祖父母と孫との関係が、家継続の上でも強調されてきた。それは、親子関係においても、父と長男との関係が強調され注目されたことの延長上にある。日本社会を特徴づけるものとしての「家」は、その永続性と超世代性を原理としたため、「家」を相続し代表となるもの間の関係として、親子関係あるいは祖父母と孫との関係が重視されてきたといえよう。つまり、それは、跡取りである男子と父の関係および父方祖父との関係である。

しかし、通婚圏が比較的狭かった時代にあつては、母の生家が距離的に近いために、幼い子どもたちは母方の祖父母の家を頻繁に訪問することも考えられる。母方あるいは妻方の親族との関

係は、その関係を成立させた女性が生存する間や、人々の記憶に残っている間は継続するが、それ以後は、たとえば分家をした家との関係とは異なり存続しないものとされてきた。それは、親と婚出後の娘との関係が、これまで注目されてこなかったのと同じ理由と考えられる^(註1)。これまでの日本の家族研究、「家」研究においては、その原理から「家」を繋ぐものが強調されてきた。そして、そこでは女性は、婚入者として跡取りを産む存在としてのみ注目され、意味を持たされてきた。しかし、婚姻により移動する女性は、生家と婚家という二つの家を結びつける存在でもあったのである。一人の女性が婚姻により生家から婚家へと移動することで、二つの家は姻戚となり、「近いシンルイ」として交際を続けていった。盆や正月などの儀礼的な交際や、「ユイ」などの労働協力の際には互いに重要な存在となっていたのである。

婚入者としての女性は、「家」の跡取りを出産することが期待されたが、誕生した子どもをめぐって母の生家が大きな役割を果たしてきた地域も多い。出産の場所は、婚家生家いずれの場合にも生家からの援助や贈答は重要なものであった。嫁の生家の両親は、誕生した孫に対して儀礼的にも心理的にも深いかかわりをもっていたといえよう。嫁の生家の役割が明確に規定されており、贈答の品々が詳細に決められていることも多い。しかし、出産が嫁の生家で行われた場合にも、名付けの儀礼は婚家に戻って行われ、それがすむとまた生家に赤ん坊とともに戻るなど、誕生した子どもの帰属についてはあくまでも婚家のものであった。

このように子どもをめぐっては、同居し「家」を継続するものとしての父方祖父母との関係ばかりではなく、母方の祖父母との関係も機能を果たすものであった。これまでの研究においては、子どもの誕生や成育過程で母の生家から果たす役割については報告が行われてきたが、それは主として「家」同士の関係に関してであったといえる。

2. 母方祖父母との関係

①新潟県朝日村高根一バアベエー

新潟県と山形県との県境には、母の生家つまり母方の祖父母の家を、孫たちが「バアベエ」と呼ぶ地域がある。これは、「ババの家」という意味である。この地域には、婚姻後、婚出した娘たちが毎夜のように、その夫を伴い生家を訪問する慣行がかつて存在し、婚出した女性とその生家との関係が強調されてきた。ここでは、新潟県岩船郡朝日村高根の事例を用いて、母方の祖父母と孫との関係を検討していきたい。

新潟県朝日村は、下越地方の北部に位置し、南西を村上市に接している。村域の90%以上を山地が占め、ブナ・スギの産地である。高根は、朝日村の中央部から北西部一帯である。三面川の支流である高根川の上流にあり、高根川と宇護蔵川の合流点に集落がある。耕地は少ないが農業と林業が歴史的にも地域の中心的な産業である。近年は、村上市をはじめとする村外に通勤する者も多い。

高根では、母の生家を子どもたちは「バアベエ」と呼ぶ。母である女性たちも自分の生家を「バアベエ」という。この地域では、「アソビニユク」と呼ばれる嫁の生家訪問が頻繁に行われていた。^(註2)

高根は、1993年の時点で一世帯あたりの平均人数は、4.9人である。この時点では、単独世帯、夫婦家族、直系家族と家族形態は多様であるが、戦前までは、子どもの数も多く、10人以上の世帯もあったという。現在でも全国平均と比べた場合、世帯規模は大きいといえる。相続に関しては、長男相続が原則であり、この点は現在まで継続されている。従って、同世代の夫婦が複数同居することは少ない。本分家関係に関しては、分家を「ブンケ」または「イモチ」と呼び、その関係はいつまでも切れることはないと言われてきた。しかし、本分家関係が協力的な同族的集団を形成するということはなく、冠婚葬祭の交際における儀礼的關係であるといえよう。

高根で行われていた「アソビニユク」と呼ばれる嫁の生家訪問とは、結婚後に夫婦そろって毎晩のように妻の生家を訪ねることである。高根では、伝統的には村内婚が志向されてきた。^(註3) この地域では、自村以外を「セケン」といい、「瓦屋根でもセケンはいやだ」とか「セケンに嫁にいけば、その家のネコにまで気をつかわなければならない」などと言われており、村内婚が高率を占めていた。そのために、女性にとって婚出先と生家とが距離的には近接しており、頻繁な往来が十分に可能であった。高根では、婚礼がすみ、夫の家への引き移りが行われると、それ以降夕食後に毎晩のように嫁の生家を訪ねることが行われた。

婚姻後、夫婦は夕食がすむと、そろって嫁の生家に出かけた。嫁の生家に出かけても、とくに仕事をするわけではなく、「お茶を飲んだり」、「おしゃべりをしたり」するだけである。嫁たちは生家で骨休めをしたというが、夕食後の数時間を嫁の生家で過ごし、婚家へ帰っていく。その際に、とくに婚家では舅や姑に挨拶をしたり、出かけることを告げることもない。そして、むしろ「アソビニ行ってこい」と勧めるのは姑の方であったという。村内の各家でこうした行為が行われているため、嫁が夫とともにその生家を訪問している間、婚出した娘がその夫とともに帰ってくるということになる。嫁たちが生家から戻っても、婚出した娘夫婦がいる場合にはそっと気づかれないように自分たちの部屋に入ってしまった、という話も聞かれた。

「アソビニユク」という行為は、子どもが誕生してからも続けられ、その場合には子どもたちも連れて行った。従って、子どもたちは幼い頃には、両親あるいは母親とともに母親の生家を頻繁に訪問し、母方の祖父母とともに過ごすことになる。その母方の祖父母の家を「バアベエ」と呼んだ。子どもたちにとって「バアベエ」は、非常に親しい家であり、とくに用事がなくても、あるいはことわりもなく遊びにいける家であったという。それは成長後も同様であり、大人になっても「バアベエ」は自由に出入りできるという。

②山形県温海町越沢—マゴノイエー

山形県西田川郡温海町は、山形県の西部、日本海沿岸地域の県最南端に位置し、雷峠・堀切峠を境に新潟県山北町に接している。気候は、山と海との地形に影響され、年平均気温も海岸地域では13°C、山間部は10°C、また積雪量も海岸では0m、山間部では3mである。

温海地域には、旧19か村が存在していたが、昭和29年の町村合併により旧温海町・念珠関村・福栄村・山戸村が合併して温海町が成立した。町の面積は、約255平方キロメートルであるが、その89%が山林を占めており、耕地はわずか4.3%に過ぎない。第二次世界大戦後急増した人口も、経済の成長とともに流出がおり、現在も減少傾向にある。昭和40年代より出稼ぎ人口が増加し、昭和47年には1,867人におよんだ。しかし、その後は減少傾向にある。生業は稲作を中心とした農業であるが、鼠ヶ関港は良質の漁港で、水揚量も多い。また、近年は温海温泉をはじめとして観光産業にも力を入れており、町の経済を支えるものとなっている。

越沢地区は、総戸数99戸、総人口477人（1990）であり、山間に孤立した立地条件にある。かつては米の単作が行われていたが、現在では兼業農家が大半をしめている。近隣の鶴岡市への転出も増加している。その当時は、炭焼きなども行われていた。また、シナ織りが盛んに行われていたが、現在では観光用に作られている。婚姻は、孤立した立地条件も要因となり、村内婚率が非常に高かった。家族構成については、三世代同居の家族が約半数を数え、四世代が同居する家族も多く見られる。

越沢では、昭和30年代まで「シュウトノツトメ」といわれる嫁の生家訪問が行われていた。「シュウトノツトメ」とは、婚姻成立後に婚出した女性が、ほとんど毎夜のように夫とともにその生家を訪問することをいう。婚家での一日の仕事を終え、夕食や風呂を終えた後に、嫁が夫とともに生家を訪ね、話をしたり、ときには酒を飲むなどして数時間過ごし、婚家に帰宅する。その際に、一応婿は藁仕事の道具、嫁は針仕事の道具を持っていくと言われているが、とくに嫁の生家において仕事をすることではなかったという。嫁の生家では、この訪問を楽しみしており、数日間訪問しない日が続くこと心配したという。子どもが誕生してからは、その子どもたちも連れて行った。

越沢では、「クチキキ」により婚姻が始まる。仲人や仲介する人が、嫁の家と婿の家とを往来し、話をまとめる。話がまとまると、婿方から玄米・酒・魚・ぞうりなどを持って嫁方を訪問する。そこで、酒を酌み交わした。このことを「ニショゴメタテ」といい、これ以降は両家は婚礼後と同じつきあいをした。そして、数か月後に婚礼となる。婚礼は婿方で行われ、その日に嫁は道具とともに婿方に引き移り、その日以後は婿方の成員となる。

婚礼の後には、嫁たちは毎夜のように生家を訪問するのである。昼間の仕事を終え、夕食や風呂がすむと、越沢の嫁たちは夫とともに生家に向かう。その時には特別に舅や姑に挨拶することもないという。嫁が「シュウトノツトメ」から戻ってみると、そこの家の婚出した娘が、その夫

や子どもたちとともに訪ねてきているということも多かったようである。

子どもたちは、幼い頃母親や父親とともに、母の生家を毎夜のように訪問することになる。そこで数時間を過ごす子どもたちと母方の祖父母との関係は、親しく密接なものとなる。子どもたちは、母の生家を「マゴノイエ」と呼ぶ。婚入者の生家とは重要な関係にあるとされ、「一番先はカカの家」といわれるほどである。さらに、婚家の長男・跡取りの仲人は、「マゴノイエ」に依頼するものといわれてきた。婚家の長男が成長した後に、嫁を迎える際の仲人は、母の生家に依頼するのである。勿論、その頃には「マゴノイエ」でも世代交替が為されており、実際に仲人をするのは母の兄弟ということになる。

このように、越沢では幼い子どものころから母の生家を頻繁に訪問し、母方の祖父母と密接な関係を築く。子どもたちにとっては、両親が「シュトノツトメ」を終了させても「マゴノイエ」は頻繁に訪問する家であり、母方の祖父母は父方の祖父母同様に親しいものとなるのである。さらに、婚家の跡取りの仲人を母の生家に依頼することにより、双方の家間の関係は維持されるのである。

③福井県小浜市高塚—センダクガエリ—

福井県小浜市は、若狭地方の中心部に位置し、若狭湾とその湾岸線に平行に走る低山脈がつくる盆地の中にある。

高塚地区は、小浜の市街地から北川に沿って3キロメートルほど上流に向かったところ、遠敷川との合流点に位置している。かつては、国富村と呼ばれていた。村の南西部は北川の堤防に面し、北東側には山がせまっており、村の南端でこれらの山と川とが接近する。この山と川とにはさまれた三角形の地域に、高塚の集落は存在する。以前は、北川の堤防も整備されておらず、しばしば氾濫し人々の生活を圧迫していた。小浜一帯は、福井県では最も温暖な地域であり、年平均気温13°C前後で、根雪の期間も1か月未満である。近年とくに雪は減少しているという。

この地域は、稲作を中心とする純農村地帯であった。農業規模は、歴史的にもあまり大きくはなく、耕地面積は1ヘクタール未満のものが七割近くを占めている。とくに大きな地主が地域内に存在することもなく、村内は比較的均質化されていたといえよう。現在では、ほとんどが第二種兼業農家であり、小浜市などへ通勤するものがほとんどである。しかし、人口に関してはその減少が大きいものの、世帯数に関しては、明治19年の戸口調査当時とほぼ変化がみられない。家族構成については、三世代あるいは二世代直系家族が多く、世帯員数も全国平均はもとより福井県の平均もよりも多くなっている。相続は、長男相続を原則としており、現在でもそれは継続されている。また、婚姻に関しては、昭和30年代以前は、圧倒的に村内婚が多数をしめており、昭和60年代でも村内婚姻率は40%を越えていた。

国富地区と呼ばれた地域は、昭和30年代まで重要な現金収入源として「ムシロウチ」を行って

いた。北海道でのニシン漁のためのムシロを生産していた。若狭は、北前船の通り道となっていたために、この地域で「ムシロウチ」が盛んに行われていたのである。国富地区の中でも、高塚はこの「ムシロウチ」が盛んなところとして知られていた。この「ムシロウチ」は女性の仕事とされており、仕事ができるようになると幼い頃からこの仕事に追われていたという。しばしばムシロウチ競争の大会が催され、そこでの順位は女性たちの誇りになっていた。^(註4)

この地域には、日本海沿岸地域に多く見られる季節的な長期里帰り慣行が存在した。ここでは、「センダクガエリ」と呼ばれ、春と秋の農閑期や正月前後に婚出した女性たちが、生家に戻りそこで20日間ほどを過ごした。その間、女性たちは普段婚家ではできない衣類や布団の調整と、新たな衣類や必要な日用品の調達を行っていた。^(註5)「センダクガエリ」の実施時期は、時代的に異なるが、年間2回から3回、それぞれ20日間程度、生家で婚出後も女性たちは暮らしたことになる。この「センダクガエリ」は、女性の年齢が33歳になるまで続けられる。^(註6)

さらに、高塚では「バン」と呼ばれる定期的里帰り慣行が行われていた。これは、婚姻成立後、嫁が婚家と生家を定期的に往復するものである。この実施方法も時代により異なるが、例えば「日曜バン」と呼ばれ日曜日ごとに婚家に滞在するものや、「市バン」と呼ばれ市がたつごとに婚家に滞在するものなどである。この慣行の結果、嫁入り当初の嫁たちは、一週間に一日程度のみ婚家に滞在し、それ以外は生家で暮らすことになる。この「バン」も「センダクガエリ」と同じ期間継続する。しかし、婚家と生家の滞在の割合は徐々に変化し、婚家滞在の日数が増加していくことになり、この生家訪問を終了する33歳の頃には月に1回ほど生家に滞在するようになっていくという。

このように、婚出した女性たちは非常に頻繁に生家を訪問し、その上長期に生家に滞在したが、結婚後に子どもが誕生すればその子どもたちも連れて生家を訪問する。子どもたちは、とくに幼いころには父や父方の祖父母と生活する時間より、母方の祖父母との時間の方が長いということになる。そして、女性たちは婚出後も衣類や日用品は、生家で調達するものとされているが、その子どもたちに関しても母の生家でともに調達するものとされていた。つまり、高塚では婚出した嫁とその子どもたちに関してではなく、婚出した娘とその子どもたちの生活の面倒をみることになる。跡取りの孫ではなく、他家に婚出した娘の孫の世話をするということになるのである。高塚では、子どもにとって経済的にも母方祖父母のもつ意味は重要である。新しい衣類や日用品は、母方の祖父母に揃ってもらっていた。さらに、幼い頃に非常に長い時間を共に過ごすため、心理的にも母方祖父母とは密接な関係をもつといえよう。

④富山県射水郡一ツケトドケー

富山県地方で行われていた嫁の生家から婚家への贈答について、大間知篤三は「嫁の里方から婚家に対して贈ることばかりが顕著であり、それは贈答というよりも、むしろ一方的な贈呈とい

う言葉がふさわしいほどである」(大間知 1967)と述べている。富山県下では、嫁の生家から婚家に対して、継続的にまた一方的な贈答が行われており、それを「ツケトドケ」といった。ここでは、大間知の記述をもとに、富山県射水郡小杉町の事例を検討してみたい。大間知は、昭和32年に親族の婚礼に参加した折の聞き書きをもとに報告をしている。

この地域での「ツケトドケ」を、大間知は「ヨメドリ」の直後に行われるもの、婚姻後幾年かにわたり月々定期的になされるもの、妊娠・出産・生児の成長の過程になされるものという三種に分類している。

婚姻直後には、婚礼の三日後に「ミツツメ」と称して嫁の生家から赤飯と酒肴が届けられる。それを、婚家では親戚や近隣に配ったという。また、七日後には「ナナツメ」といい、餅が届けられる。その餅の大きさは家により異なるというが、一合餅、一合半餅、三合半餅などであった。その餅も「ミツツメ」の時と同様に、近隣や親戚に婚家から配られたという。

この地方では、「チョウハイ」と呼ばれる里帰り慣行が存在したが^(註7)、嫁入り後初めての里帰りを「ハツジョハイ」といい、嫁入り後一か月ほどして行われた。その際には婚家で餅を搗いてもらい、10日間ほど生家に嫁は帰ったという。そして、里帰りから婚家に戻ることを「チョウハイガヤリ」といい、「ハツジョハイ」から戻る時には、生家の母親が五重箱にいた餅と反物を四巾の紺の風呂敷に包み、担いで送ってきた。それ以後の「チョウバイガヤリ」の時は、餅一重だけを持ち帰ったという。

その後の定期的な「ツケトドケ」は、正月には鏡餅を舅に送り、子どもが生まれてからは、その子どもに反物と下駄やお菓子を届けた。三月の「セック」には草餅、四月には祭りだからと赤飯をもって婿方を招待にいった。五月も「セック」の餅を送り、農家の場合には「サツキザカナ」を持参した。六月には「イリガシ」、七月には土用餅と「イナダ」と呼ばれる小鯛の干物を届けた。八月は中元としてそうめんと鯉節を届けた。九月には秋祭りの餅を届ける。十月には秋ザカナを届け、十二月には八日は「ハリセンボ」(針歳暮)で、新しく嫁を迎えた家に子どもが餅をもらいに集まり、夜になると仮装した青年たちが集まってくる。その時の餅は、嫁の生家から届けられ、その数が足りないと嫁が恥ずかしい思いをしたという。

また、婚出した娘が産んだ孫に対しての「ツケトドケ」がこの他にもある。嫁の初めての妊娠のときには、「腹祝」と称して嫁の生家から紅白の反物と黒豆入りの強飯が届く。これらが届いて初めて婿方では、嫁の妊娠に気付くともいわれている。出産後三日目に、直径五寸ほどの力餅と産着が届く。七日目には、紋付きの衣装が届けられる。男児の場合には、年の暮れに天神様の像か掛け軸、三宝、お神酒すずを届ける。五月の節句の鯉幟り、それ以前は七夕に子ども箆笥や酒肴を届けたという。女兒の場合には、三月の節句に雛人形が届けられた。男子五歳の袴祝いの衣装は、嫁の生家から贈られる。

以上のように、嫁の生家から婚家へと一方的に贈答が行われた。大間知は、生家から婚家への

「ツケトドケ」ばかりが繁くかつ重いことが明らかである、と述べている。婚家から生家へのは、贈り物の一部を返すお返しや、嫁の里帰りの際の手土産程度である。定期的な「ツケトドケ」は、婚姻後3年間程度は欠かさず行い、徐々に回数が減じていくというが、正月と盆に関しては生涯続くという。孫への「ツケトドケ」に関しては、中には18歳の元服の折の羽織も嫁の生家から贈る地域もあるという。

この地域では、嫁となった女性にとって、生家は経済的に非常に重要なものである。生家からの十分な「ツケトドケ」がないことは、嫁の婚家での立場にも影響を与えるであろう。孫たちにとっては、母方の祖父母はその成長の節目にあたる儀礼ごとに大きな役割を果たすことになる。

3. 母方祖父母の意味

「アソビニユク」と呼ばれる嫁の生家訪問を行っていた新潟県朝日村高根では、嫁となった女性たちは、ほぼ毎夜のように夫とともに子どもも連れて生家を訪問していた。子どもたちは、その母の生家を「バアベエ」と呼び、母親とともに訪問するだけでなく、頻繁に、まさに遊びに行っていた。嫁が生家を夜毎訪ねる際には、とくに舅や姑に挨拶をすることもなく、むしろ舅たちの方から「アソビニ行ってこい」と勧めるほどであったという。ここでは、嫁やその子どもたちが生家を訪問することは、こっそりと行われていたわけではない。孫たちと母方祖父母との関係は、村落社会の中で重要な関係として認識されていたのである。ただし、その関係は制度的なものや経済的意味合いをもつものではなかった。

「シュウトノツトメ」の行われていた山形県温海町越沢の場合も、婚出した娘がその夫と子どもたちを伴って、毎夜のように生家を訪問していた。ここでも、婚出した娘とその夫による生家訪問は、村全体の行事となっており、夕食後には家族のメンバーが変化したのである。さらに、越沢では母の生家を「マゴノイエ」と称し、親しくするのは勿論のこと、孫たちが成長後にはその仲人を依頼することが多かった。

一方、「センダクガエリ」が行われていた福井県小浜市高塚では、婚出した女性たちは「センダクガエリ」のために、年間数十日にもわたり生家に滞在し、さらに「バン」と呼ばれる定期的里帰りが加わり、婚出後も非常に長期間相変わらず生家で暮らしていたのである。ここでは、「嫁に出してもかわらない」と言われるほど女性たちは生家に滞在していた。また、高塚では、嫁とその子どもたちに関する衣類などは、生家が負担するものとされており、嫁にとってその生家は経済的にも重要な存在であった。

嫁の生家から、頻繁で多大な贈答「ツケトドケ」が行われていた富山県射水郡では、嫁の妊娠・出産および子どもの成長に伴い、多くの物が贈られてきた。成人の祝いまでも含めて、娘の生んだ子どもたちのために生家の親たちは常に心をくだき、経済的にも大きな役割を果たしていた。女性たちにとって、生家の意味は経済的にも必要なものであった。

以上のように、これらの地域では子どもたちにとって、母方祖父母が果たしてきた多くの役割が存在した。その意味について考えてみたい。

①経済的意味

「ツケトドケ」および「センダクガエリ」を行う地域では、嫁の生家のもつ経済的な意味が大きい。富山県射水郡は「ツケトドケ」として、子どもたちはその成長の過程で節目ごとに母方の祖父母からさまざまな贈答を受ける。これは、明らかに家間の問題でもある。しかし、子どもたちにとっても、これらの贈答が行われなかった場合には、地域社会における成長の過程を進めることができなくなってしまうということになる。

福井県高塚では、幼い頃の大半の生活の場が母の生家であり、衣類や日常生活に必要な品々は母の生家の負担となる。母方祖父母の存在は、彼らの生活を支えていく上で必要なものであった。

②儀礼的意味

いずれの地域においても、子どもの成長の儀礼の際には、母方祖父母は「一番のシンルイ」などと言われ、それぞれの祝宴の座順も高位に置かれる。勿論、贈答の負担も重い。

③公的存在としての意味

母の生家を「マゴノイエ」といった山形県越沢では、婚出した娘の長男の婚姻の際に「マゴノイエ」が仲人を務めた。つまり、家の相続者である跡取りの婚姻の仲人は、その母の生家に依頼するということである。「マゴノイエ」と言い、幼い頃から頻りに往来していた家が仲人を担当するということになる。ここでは、母の生家との関係が、次世代まで村落内において公的なものとして認識されているということであろう。

④心理的意味

婚姻によりその帰属の変更が為され、実際の生活の場を移動させた女性にとって、婚出後の生家が、心理的に重要であることは否めない。ここで取り上げたいずれの地域でも、女性たちは婚出後もさまざまな点で生家との心理的な関係を保ち続けていたであろう。その場合に、子どもたちにとっても母がもつ心理的な関係は十分に影響する。その中で、「アソビニユク」という嫁の生家訪問を行い、母の生家を「バアベエ」と読んでいた新潟県高根地区では、母の生家がとくに経済的な意味をもつことはなかった。しかし、「バアベエ」はいつでも訪ねられる親しい場所として、子どもたちは成長後も関係を維持していた。「バアベエ」との関係は、制度的なものでもなく、したがってとくに規定がないため、その関係は個々の関係により非常に多様なものとなっていた。

4. 結 語

祖父母と孫の関係の中で、母方祖父母との関係を取り上げてみると、その関係はいくつかの機能を果たしてきたといえる。直系家族を形成してきた日本の家族の中で、父方祖父母と孫との関

係は、「家」存続のために必要な関係として見られてきた。それに対して、母方祖父母との関係は、世代を超えることはなく、父系的家族の中では注目されないものであったといえよう。しかし、ここで見てきたように、とくに日常の生活の上で、母方祖父母の果たしてきた役割は重要なものであった。父方祖父母と孫との関係との比較から、母方祖父母と孫の関係の特徴を考えてみたい。

まず、日本の「家」の継続に、母方祖父母と孫との関係はかかわらないものである。父系的直系家族を連続させることで継続させてきた日本の「家」にとって、婚出した娘の子どもとの関係は、系譜上「家」のラインにはならない関係である。^(註8)

伝統的な日本の家族において、祖先というものは父方の親子関係をたどっていくものであった。「家」の継続を最も価値のあることと考えてきた日本の家族にとって、祖先の存在は重要で価値のあるものであった。従って、祖先であるか否かは、同じ世代深度の関係であっても大きな違いを生んだのである。

つまり、母方祖父母と孫との関係は、直接かかわりをもった孫の生存により成り立つ関係である。この関係が世代を超えて続くことはない。そのために、相続者でなくとも次三男が分家した場合の祖父母と孫との関係とは異なるのである。

以上のように、母方祖父母と孫との関係が、日本の家族研究の中で注目されてこなかったのは、世代を超えていけないという点が原因であった。これは、婚出した娘と親との関係にも言える点である。「家」を中心として日本の家族を見ていくと、その存続に貢献しない関係は見落とされがちである。しかし、世代を超えていけないということは、世代深度の深さを問題にする場合には注目されないということであって、その関係が重要ではないということではない。

父系的な関係こそが公的なものと見做されており、母方との関係は姻戚としての家間の関係以外は「表に出ない」ものであったのではないだろうか。しかし、婚出した娘たちは、婚家という新しい環境の中で、母となり、多くの不安や心配を抱えていたに違いない。その際に、頼りにしていたのは自らの生家ではなかったか。一方で、婚出させたとはいえ娘との関係は、婚礼の日を限りに断ってしまえるものではなかったであろう。しかし、いずれもこの関係は心理的なものであり、制度的なものでもなく、記録に残るものでもなかった。この点が、当事者にとっては重要なものであったにもかかわらず、これまであまり取り上げられてこなかった理由ではないだろうか。

隔世代関係は親子関係とは異なり、親子関係が緊張した関係であるのに対して、その緊張関係を和らげる働きをもっている。なかでも、公的ではなく、とくに取り決めもない母方祖父母との関係も、孫たちにとっては重要な意味をもつ人間関係であった。ただし、このような個人を中心とした関係は、これまでのように集団として日本の家族をとらえた場合には注目されないものとなっていたのである。

〈註〉

1. これまでの日本の家族研究における女性のとらえ方は、婚姻後に婚家の嫁として、いかに婚家での成員権を得るかという視点からのものであった。女性の婚出後の里帰り慣行に関する研究が、瀬川清子らにより行われてきたが、これも婚家と生家との家間の関係として、あるいは女性の労働力の分配としての検討である。
2. 婚姻後、女性がその生家を訪問することをここでは、「嫁の生家訪問」という表現を用いるが、この場合は女性の「嫁」としての立場が強調されることを意味する。
3. 高根地区では、配偶者選択は伝統的には、本人同士によるものと親の意志によるものがあった。いずれの場合にも、「チュウニン」と呼ばれる仲人が双方の家を往復して話を進めた。話が決まると「キマリザケ」となり、嫁方で祝宴が行われる。その後は、この関係が公表されたものとなり、嫁や婿が双方の家を訪問した。
4. 女性たちは、婚姻後は婚家でムシロうちの機械を2台並べて、姑とともに早朝からムシロを競争でうったという。
5. センダクガエリで、嫁が生家に帰る際には「ハンマイ」と呼ばれる米を婚家から持たせていた。ここには、嫁の食生活を婚家をもつべきであるという意識が見られる。しかし、実際には分量は十分ではなく不足分は生家の負担となっていた。
6. このような長期間にわたる嫁の生家訪問は、嫁の不在中に姑という別な女性の存在により成立する。従って、家族構成の変化によりこの慣行が終了することもあった。
7. 「チョウハイ」は、汚れた着物などを生家に持って帰り、きれいにしてきた。
8. ただし、長崎県五島などでは命名の際に、女兒の場合に母方の祖母の名前を継承する。この他にも、祖名継承の方法として母方の祖父母の名前をとることも報告されている。(上野和男 1977, 1982)

〈参考文献〉

- 中込睦子 1987 「若狭地方における嫁の『里帰り』と家族の構造」『史潮』新21
- 林 研三 1992 「婚姻慣行と家結合—母の生家をめぐる事例分析」『現代法社会学の諸問題』民法法研究会
- 大間知篤三 1967 「ツケトドケとウッチャゲ—富山県下の婚姻習俗」『婚姻の民俗学』岩崎美術社
- 佐藤光民 1956 「羽越国境地方の婚姻制—シュウトノツトメを中心として」『日本民俗学』3-4
- 1988 『温海町の民俗』山形県西田川郡温海町発行
- 蓼沼康子 1989 「里帰り—バン・センダクガリからみた若狭の女性」『ふいんど』4
- 1996 「婚出女性の生家訪問」『城西大学女子短期大学部紀要』13-1
- 植野弘子編 1994 『日本の家族における既婚女性の娘としての意味』(平成5年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 上野和男 1977 「五島の祖名継承法と親族組織」『政経論叢』45(6)

- 1982 「日本の祖名継承法と家族」『政経論叢』51(5/6)
- 1993 「日本の隔世代関係についての一考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』50
- 上野和男編 1986 『若狭国富村落社会の構造』明治大学政経学部社会学研究室
- 八木 透 1994 「シュウトノツトメと家族慣行ー南庄内および越後北部山村の事例を中心として」
原泰根編『民俗のころを探る』初芝文庫